

# Academy of Art University にみる アメリカの芸術大学における芸術教育について

## A Study on Art Education in American Art Schools : Case Study of Academy of Art University

浅 井 貴 也  
Takaya ASAI

### I. はじめに

現在、日本では少子高齢社会に突入し、教育分野においては大学のユニバーサル化が進んでいる。これを受けて大学では、大学教育（学士課程）の質の保証や、国際通用性を備えた学士課程教育の構築など、多岐に渡る改革が求められている。大学における芸術教育もその例外ではなく、本学芸術メディア学科においても、教育課程の再編、学科内のコースを超えたコラボレーション活動や地域との連携などの事業への取り組みを継続しておこなっている。

文部科学省委託「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」の一環として、平成20年3月に先進事例調査として訪問した、カリフォルニア州サンフランシスコ市にある Academy of Art University（以下アカデミーオブアート大学）での聞き取り調査結果に加え、同大学、ならびに大学院の卒業生としての筆者の経験をもとに、米国の芸術大学がどのようにして大学教育の質を維持し、社会で活躍できる人材の育成へ取り組んでいるか芸術教育の視点から考察する。

### II. アメリカの芸術大学について

アメリカの大学で芸術を学ぶには2種類あり、1) 州立大学やコミュニティカレッジなど、リベラル・アーツを講義科目などで一般的に学び、その中から芸術を専攻することにより、人間性を全面的に発展させていく「全人教育」タイプと、2) 芸術を専門的に学ぶ大学では、芸術に関する演習科目を中心に学習し、リベラル・アーツを教養として学ぶことにより、実用的で実践的な学びに重きを置いた「実学教育」タイプに分かれる。卒業時に習得できる学位は、前者が文学士号、BA（バチュラー・オブ・アーツ）であり、後者は芸術学士号、BFA（バチュラー・オブ・ファインアーツ）である。BAとBFAはリベラル・アーツと芸術のどちらに重きを置くかが異なっており、BAにおいては、2/3をリベラル・アーツ、残り1/3を専攻分野（この場合は芸術）の学習をおこなう。BFAにおいてはその逆で、2/3を芸術の学習に充て、1/3をリベラル・アーツに学ぶ。アカデミーオブアート大学は、専門分野の学習により、実用的、実践的な学び中心とした「実学教育」を柱としており、特に卒業後の進路に役立つような知識

と技術の習得を目指しており、大学の性質としては職業学校に近い。

### Ⅲ. 芸術教育に対する考え方

#### 1. 単位の実質化と卒業要件

一般的に米国の大学は、入学よりも卒業することが難しいことで知られている。入学時より教育課程に沿った学習を開始し、卒業要件を満たすまでの道のりが、日本の大学よりも困難なためである。卒業に必要な単位数（卒業要件単位）は日本と米国を比較しても同程度といえる<sup>i</sup>。しかし、米国の芸術大学においては、作品制作における完成品としての結果はもちろんのこと、制作課程のプロセスやコンセプトが重視されるため、授業で要求される課題作品の質と、その作品を完成させるために必要とされる課外時間での学習量が日本の大学とは異なる<sup>ii</sup>。筆者の経験では、1週間のうち1科目につき最低6時間以上を授業時間外で課題制作に費やしていた。一つの課題に費やす時間やエネルギーは形となって作品に現れるため、課題の評価に大きく影響していた。このことを考慮すると、各学期に履修できる科目の数は、自然と限定され、アカデミーオブアート大学のような Semester 制を導入している大学では、半期ごとにおよそ4～5科目程度の履修が通常である。過度の科目履修は、科目ごとに要求されるパフォーマンスの限界を超えてしまうため容易ではないと言える。

卒業要件単位数以外には、履修した科目の成績評価の平均値、GPAがある。単位数の修得に加え、それぞれの科目におけるある程度の成績レベルも要求される。アカデミーオブアート大学では、卒業要件として GPA2.0 以上が必要とされる。

3つめの卒業要件として、学科の教員によるポートフォリオ審査 (Portfolio Review) がある。在学中に作成した課題作品や自主制作物を作品集として提出し、プレゼンテーションすることが求められる。ポートフォリオとは、自分の作品をまとめた作品集のことであるが、主体的で積極的な学習の記録として、また、学生の成長を評価するためのツールとして位置づけられている。大学で定められたアカデミックポリシーと、学科ごとに設定されたディプロマポリシーをもとに、卒業を希望する学生の知識と技術が学士号を修得するに相応しいかをここで判断される。相応しくないと判断された場合、学科長により指定された科目を履修し、足りない知識や技術を修得することが求められる。アカデミーオブアート大学では、この審査に合格し、かつ卒業要件単位数と GPA2.0 以上という3つの条件を満たした者が卒業できるシステムになっている。このハードルを乗り越えるのは決して容易ではなく、実際に卒業まで辿りつける学生は、全体の6割程度に留まる<sup>iii</sup>。大学入学を志望する学生のタイプは様々であるが、芸術分野の中で自分が何を学習したいのか、卒業後はどのような進路を選択するのかなど、学生自身にある程度の意識が求められるため、卒業まで辿りつけることができるのは、やはり目的意識が最終的には明確に定まっている学生が中心である。

## 2. 実践力のある人材の育成と大学教育の質の保証

この厳しい卒業要件が存在する背景として考えられるのは、卒業後の進路を少しでも有利に進めるためのスキルと実践力を養うことが言える。芸術という特殊な分野では、他者にはない強い個性を磨き上げることが必要であり、そのための知識と技術を大学で習得することが必要となる。実践力は、単に道具の使い方や物作りの手順を学ぶに留まらず、創造性を養い、そのプロセスについて深く掘り下げて思考し、想定される問題を解決するための方法を芸術の視点から提案できる力である。また、自他の作品に対しての批評やコンセプトなどをお互いに理解するために必要なコミュニケーション力も重視される。それぞれの専門分野において大学が育てる力については、大学案内やシラバスに各学科のディプロマポリシーとして記載されている。

もう一つの理由としては、大学教育の質の保証が考えられる。大学内部の評価のみならず、対外的な要素、例えば在学生や卒業生の社会における活躍が増えることは、大学の評価が高まることにつながる。社会における大学の貢献度は、産学連携や地域とのつながり、輩出する学生の質などによって判断されている。大学が提供する教育の質を保つために、ハードルの高い卒業要件や企業とのコラボレーションなど様々な個性ある取組みを行っている。学生が習得した知識や技術が将来の職業で活かされ、彼らの活躍が社会で評価されることが大学の評価へと繋がる。このサイクルがアカデミーオブアート大学では上手く循環しており、大学教育の質の保証に結びついているのではないかと考えられる。

## IV. カリキュラムに見る芸術教育の特徴

### 1. 基礎美術の重要性

アカデミーオブアート大学では、入学後、最初に学習するのが「基礎美術科目」(Foundation Art Courses)である。基礎美術とはデッサン、スケッチング、色彩、立体造形など、美術における基礎であり、専門的学習をおこなう前段階として学習する科目群である。そのほとんどが必修科目であり、1・2年次に修得するのが通常である。基礎美術のスキルは、この後へと続く専門分野の学習における創造的思考を表現するためのベースとなるため、初年次教育の一貫として行われている。これらの科目は半期15回、週1回6時間で展開されており、通常の演習科目(半期15回、週1回3時間)と比較すると授業時間が長く設定されている。米国の大学においては、一部の専門分野を除き、入学後も専攻の変更が可能のため、基礎美術を学習している間でも、学生自身の適性や進路について考える時間が与えられている。

### 2. 専門分野の学習

基礎美術科目の修得と同時に、学生がそれぞれに専攻する芸術分野における「専門科目」(Major courses)の履修が始まる。アカデミーオブアート大学では、16の分野ivがそれぞれ学科として構成されており、各学科のディプロマポリシーにもとづいた教育課程が用意されて

いる。主要な専門科目は、「基礎・応用・発展」の3段階に分かれており、履修時には既に別の科目が修得済みであることなどの履修条件が設定されていることが多い。専門科目には、学科ごとにコアとなる教育内容を基礎として学び、一通りの知識と技術を習得する「学科共通科目群」と、その中でも学生が特に重視する分野の学習をコースに分かれて学習する「コース専門科目群」の2種類ある。例として、筆者はウェブデザイン・ニューメディア学科に在籍し、広く多岐に渡るコンピューターアートの分野における基礎をコアカリキュラムで学習し、その中から選択したニューメディアの分野を重視した科目群を履修していた。

### 3. 一般教養としてのリベラル・アーツ学習と芸術

全学的に共通で開講される科目として、「リベラル・アーツ科目」(Liberal Art courses)がある。人文、社会、自然科学の分野を選択式で履修する。これらの科目は一般教養的なものではあるが、共通して芸術との接点を重視し、学生それぞれの専門分野に役立てられるような内容を学習する。例として物理学の授業では、運動力学を三次元コンピューターグラフィックスに関連させた内容や、自然界の様々な色彩的な現象を美術に結びつけ、自然における光景がどのような原理で我々が認識しているのかなどを学習する。また、ビジネスや法律に関する科目では、芸術分野の就職に役立つ様々な知識、独立起業を目指すための心構えや税金対策などの有用な内容を学習する。高度なレベルの授業を展開しているとは言えないが、教養として身につけやすく、専門分野に活かされるような内容を中心に学習する。

## V. 授業展開方法と学習サポート

### 1. 少人数制によるコミュニケーションベースの授業

リベラル・アーツ科目など全学向けに開設されている講義科目では、履修者数が必然的に多数となるが、実習・演習科目においては、原則的に少人数制教育をおこなっている。科目ごとに履修者数の上限と施設・設備が設定されているため、科目内容に相応しい環境が整えられている。科目の内容が高度になるに連れて履修定員数は少なくなり、卒業研究においては担当教員と学生の1対1となる。少人数制クラスでは、教員と学生間の双方向コミュニケーションがベースとなっており、お互いの考え方を尊重し、時には意見を衝突させるなどのディスカッションが日常的に行われている。授業では、課題作品のプレゼンテーションを制作した学生自らがを行い、作品のコンセプト、制作の課程やポイントなどを説明する。その後全員で批評し、評価される点や改善点などについて意見を出し合い、お互いに考え、学び合うスタイルが定着している。作品による自己主張と他者から受けるフィードバックを通して、周りが自分の作品に対してどのような考えを持っているのか、そしてどのように感じているかを学ぶ。課題は最終的には、教員によって採点評価されるが、クラスメートによる評価は教員のものとは違った、作品の完成度を高めるための有意義なアドバイスを得ることができる。学生間にレベル差は生

じてしまうが、競争による上下関係と言うよりも、お互いに切磋琢磨する環境がある。

## 2. 学内外における学生作品の展覧会

授業の課題として制作された作品の中でも特に優れているものは、学内の施設の至る所に常時展示されている。学生にとって作品を鑑賞することも学習の一つと考えられているからである。優れた作品を鑑賞し、またこれからの作品制作の参考として、課外時間には真剣な目で観察しメモを取る学生を多く見ることができる。また、年度末の5月になると、大学をあげての学外展覧会（Annual Spring Show）がイベントとして開催される。自薦、他薦を問わず、学生たちは自由にエントリーが可能で、教員で組織される選考審査会を通過した作品が展示される。展覧会の最初は、企業や地元の文化人を招いて作品が披露され、作品を制作した学生との交流会から始まる。美術学科生が制作した絵画作品のチャリティーオークション、ファッション学科によるファッションショーなども同時開催される。その後は一般向けに夏休みの約2ヶ月間公開され、進学を希望する高校生を対象とした学生スタッフによるツアーが多く見受けられる。この学外展覧会は大学が特に力を入れている部分であり、地域や学外の人々と学生とを結びつける意味でも大きな役割を担っている。授業内の課題作品展示から学外展覧会まで、その規模は様々だが、作品を公開する機会を数多く提供していることから、芸術における発表と鑑賞を重視していることがわかる。

## 3. 現場のプロフェッショナルによる指導

講師陣は芸術の第一線で活躍しているデザイナーやアーティストを教員として数多く迎えている。メリットとしては、学生が目指す職種のプロから直接指導を受けられることであり、現在のトレンドや仕事に関する話を聞くことができる。そのほとんどが非常勤講師であるため、大学内に彼らの研究室はなく、授業時間外ではオフィスアワーやメール、電話での遣り取りに限られてしまうのが、デメリットとして挙げられる。教員構成の約80～90%が非常勤講師であり、専任教員は、学科長と他数名と限られている。研究機関としての大学の印象は感じられない。各分野における著名人を講師と迎えることが、大学としての一つの魅力となっている。教員の中には、アカデミーオブアート大学の卒業生も数多く含まれており、同大学を卒業した学生が社会で経験を積んだ後、教員として大学に還元している。

## 4. ティーチング・アシスタント（TA）や補助教員による授業内サポート

少人数制による授業の中において、担当教員が必要と判断した場合には、ティーチング・アシスタント（以下、TA）を補助として動員することが許されている。TAの多くは、成績優秀な大学・大学院生であり、授業の中で学生をサポートをする。これにより、教員は授業のスピードを維持し、クラス全体を見渡すことが可能となる。また、留学生の割合が全体の3割程度を占めるアカデミーオブアート大学では、語学サポートとして、専門の英語教員が留学生を

授業内でサポートしている。具体的には、授業ノートの作成や担当教員とのコミュニケーションの補助、そして課外時間における勉強会の実施などである。特に基礎系の科目においては、通常の科目を留学生対象として別開講している。TA や補助教員は、この次に述べる課外時間においても対応しており、科目担当教員だけでは対応が難しい細かな指導を可能としている。

#### 5. 課外時間における学習サポート

課外時間での学習サポートとして、担当教員はそれぞれ「スタディーホール」(Study Hall) を週に一回以上設定している。スタディーホールとは、授業時間内には聞けなかった疑問や課題に関する質問、制作途中の作品に関するアドバイスを受けるなど、教員と学生が交流する場所である。レポートや論文の校正や文章作成は「ライティング・ラボ」(Writing Lab) という施設を活用できる。1 回 1 時間の枠を事前に予約しておけば、英語専門のスタッフが対応してくれる。特に語学力がネイティブレベルに達していない留学生にとっては、この存在はとても大きいと言える。また、入学時に割り当てられるアカデミック・アドバイザーは、履修計画を立てる上で、シラバスだけでは解決できない悩み、成績評価の確認など学業全体に関する相談を受け付けている。授業内外での様々なサポートを大学が提供することにより、学生は積極的にサービスを利用し、学業に専念できる環境を整えている。

## VI. 産学連携の取り組み

### 1. 企業とのコラボレーションによる実践的な学習体験

米国の芸術大学において、産学間連携は個性のある取り組みの一つである。アカデミーオブアート大学では、「共同研究」(Collaborative Study) という特別科目が通年で開設されており、学科より選抜された代表学生によって構成されている。毎年異なった企業がスポンサーとして協力しており、企業から提示される問題をテーマに芸術の視点から問題解決方法の提案をグループプロジェクトとして取り組んでいる。筆者が在籍していた時には、フォード・モーターズによる新しい車のコンセプト制作や、ナイキがスポンサーの時には、新素材を用いたスポーツウェアのコンセプト制作などを行っていた。履修は選抜制という限定されたものであったが、実際、選ばれた学生の中には、この機会を契機にスポンサー企業へ就職が決まった学生も見受けられた。この授業は言わば学内インターンのようなもので、企業と密接に関わることにより、学内で実際の仕事の現場を体験することが可能であり、将来の職業訓練としても効果は高いと言える。

### 2. 就職を意識したインターンシップ

アカデミーオブアート大学では、積極的に学外でのインターンシップを奨励しており、事務局ではインターンシップ専門のスタッフが対応している。インターンシップ参加の条件として

は、入学後3年が経過していることと、GPA3.0以上の2点である。大学にインターンシップ派遣を要請している企業へ実習として赴き、週30時間を限度に実務活動をおこなう。企業側のスタッフと大学側のスタッフが顧問として監督し、完了時には実習日誌の記録と提出が求められる。インターン期間としては、短期（数週間）から長期間（半年から1年間など）と幅広い。実務経験を積むことは、就職する上でのポイントとなるため、学生には人気が高い取組みの一つである。現在、日本においてもインターンシップは積極的に行われているため、特筆すべき点ではなくなりつつあるが、大学と企業間での密接な関係を築くためにも重要視されている分野である。特に企業からの寄付行為が頻繁に行われているアメリカの大学においては、その意味合いも日本の大学とは少し異なるであろう。

### 3. 企業関係者による講演会の開催

授業外での産学連携としては、さまざまな分野の企業関係者が度々大学を訪れ、学内講演会をイベントとして定期的に開催している。学生であれば自由に参加可能であり、業界における最近のトレンドについて、新しい技術や製品のデモンストレーションや企業が取り組んでいる先進事例について聞くことができる。特に自身の専攻とは異なる内容であっても講演会に参加する学生は非常に多く、関心度はとても高い。筆者も数度に渡って参加してきたが、特に記憶に新しいのは、当時、トヨタ・アメリカが新しいブランドとして立ち上げた「サイオン」(Scion)の第一号車として販売を予定した、「xB」という車の説明会であった。参加した多くは、工業デザイン学科の学生であったが、トヨタ社の担当者によるブランドコンセプトの説明や実車の展示、試乗会は学生にとって魅力のある内容であった。企業にとっても、将来の人材養成への貢献や企業の宣伝効果も期待できるため、積極的に講演活動を行っており、大学、学生、企業の三者にとってメリットの多い取組みである。

## VII. 地域に開かれた大学

アメリカでは、社会で働く人々が再び大学へ戻り、学歴向上やスキルアップを目指す傾向が日本よりも強い。経済的理由で進学を諦めた人がそのまま社会に進み、大学での勉学を試みるなどのケースも多い。また、転職のためのスキルアップを目指し大学院で学ぶ人もいる。勉強する理由は人それぞれであるが、このような人々を米国では多くの大学が受け入れている。受け入れを可能としている理由は、1) 1科目からの科目等履修が可能、2) 夜間・週末、夏休み期間における科目開講、3) 4年間で卒業という時間を限定しない考え方が挙げられる。日本では一般的に大学というと18歳人口がターゲットというイメージがあり、社会的に見ても、地域に開かれている大学というのは、社会人講座やワークショップなど一部に留まっている。科目等履修や聴講のように、科目ベースで授業料を支払うことができるのであれば、1科目からの履修を積み重ね、自分のペースで卒業することも可能であると思われる。

アカデミーオブアート大学では、大学院において社会人や定年を迎えた年配の方々が多く見受けられる。全員が過去に芸術に関する勉強や仕事をしてきた訳でもなく、まったく別の分野から転向した学生や大学院から初めて芸術の勉強をする学生もいる。仕事をしながら勉強している学生のために、夜間や週末に開講されている科目も多く、特に大学院の科目はほとんどが夜間に集中している。また夏休みの期間に開講されるサマースクールを活用して、短期集中的に科目履修も可能である。いずれの方法にせよ、根底にあるのは1科目からの科目履修と個人で設定できる卒業までの道のりがあるからこそ、社会におけるニーズに応えることができるのだと言える。

## VIII. ま と め

これまでアカデミーオブアート大学を例として、アメリカの芸術大学における芸術教育の取組みについて、カリキュラム、授業展開方法、産学連携、地域に開かれた大学を中心に紹介した。アメリカの教育方法が日本の大学に有用かは別の課題として、さまざまな問題を抱えながらも総じて成功しているアメリカの大学における教育システムに関しては、参考となることは数多いと考える。教育課程においては、アメリカの教育は「競争型」と言われるが、確かに入学から卒業までの各段階には競争が存在し、数々の試練を乗り越えた者だけが卒業できる仕組みになっている。しかし、この競争は日本で考えられているものとは大きく異なり、他者と比較するための競争と言うよりも、むしろ自分が成長するための努力を指すのではないかと考える。授業展開方法や学習サポートにおいては、教員、補助教員や職員が教育の理念をもとに、様々な方法で大学の授業の質の向上に取り組んでいる様子が現れている。産学連携や地域に開かれた大学は特段に意識しているというよりも、既に大学の一部として普段からおこなわれている印象を受ける。これらの取組みは芸術大学としての理念をベースに全て密接におこなわれているため、合理的、かつ効果的でもある。

---

<sup>i</sup> アカデミーオブアート大学における卒業要件単位は132単位

<sup>ii</sup> アカデミーオブアート大学では、1単位につき必要とされる学習時間が講義科目で15時間、実習科目で30時間、演習科目で45時間に設定されている。講義、実習、演習科目は、1科目につき3単位が与えられる。ただし、これは必要最低限の時間であり、実際にはこれ以上の学習時間を要する。

<sup>iii</sup> アカデミーオブアート大学院コンピューターアート学部長 Ms. Lourdes Livingston 氏への聞き取り調査より

<sup>iv</sup> アカデミーオブアート大学では、美術、写真、イラストレーション、インテリアデザイン、ファッション、映画、工業デザイン、グラフィックデザイン、広告、建築、アニメーションと特殊効果、ゲームデザイン、マルチメディア・コミュニケーション、音楽（視覚メディアのための音楽）、ウェブデザインとニューメディアの全16学科で構成される。